知る限りこれだけである。

当初陸地測量部は全国を覆う基本図を二万分の一地図としていたが、当時の国力と技術では時間と経費がかかりすぎるので、明治二十三年に基本図の縮尺を五万分の一地図に切り替えた。この作業は明治二十五年、地図の測量となる三等三角測量から始められ、ケバ式地形表現をやめるなど二十八年式図式が制定され、さらに同三十三年に改正された(18)。

図10　明治37年発行「五万分の一地図　宮崎」部分

宮崎においては明治三十五年に測量が実施され、同三十七年十二月二十八日に最初の「五万分の一地図宮崎」（三色刷）が発行された。当時の五万分の一地図は軍事優先であり、当然名勝旧跡や市街案内図ではなかった。また50mを1㎜に描く地図であり、そこに市街図を求めることはできないが、現在大きく広がった宮崎市街地の当時の状況を知るには重要な地図となる（図10）。当時すでに集落があった場所は大雨時にも水没しない沖積段丘等の微高地帯であり、水田地帯は大淀川の旧河川等の低地帯であることがひと目で理解され、市街地発展の地理的背景を教えてくれる。

「五万分の一宮崎地図」は、大正六年に「鉄道補入」し、その後昭和七年、同十年に修正を行っている。戦後、陸地測量部は解散し、内務省に地理調査所が設置され、陸地測量部の仕事を引き継いだ。その後、内務省は解体して建設院、建設省（現国土交通省）と所管が変わり、昭和三十五年に名称を国土地理院に変え、漸次地図の修正を行って今日に至っている(19)。

七　宮崎県地図に添付された宮崎市街図

前述した「明治十八年宮崎市街之図（図6）」は宮崎県管内全図に添付された宮崎市街図であるが、筆者の収集できた限りでは明治年間において独立した（「宮崎県地図の添付図ではない」の意）宮崎市街図は確認できていない。

また宮崎県地図に添付された地図としても明治四十年の「宮嵜町（実測宮崎県地図添付図）」、同年「宮崎市街図（宮崎県実業案内添付図）」まで、明治十八年から約二十年間新たな宮崎市街図を確認できていない。前述したように大正初期ですら『宮崎町史』、『日州新聞』、『宮崎県大観』等が明治十八年の「宮崎市街之図」を使用していることを考えると、同地図の完成度が高いだけに街が発展しても、その後二十年近く新たな宮崎市街図は作成されなかっ

たのかも知れない。

明治四十年に二十余年ぶりに宮崎市街図が発行された背景には東宮殿下（後の大正天皇）の宮崎行啓があったと思われる。皇太子の宮崎行啓は初めてのことであり、宮崎神宮の大造営の竣工、初めて電灯が灯り、電話が通じるなど、明治四十年は宮崎にとって「萬のものが新しく設備される年」[20]であった。このような状況にあって県内外から多くの人々が宮崎に訪れることもあり、宮崎県地図に宮崎市街図が添付されたと思われる

明治四十年の「宮嵜町」地図を見ると、明治十八年の「宮崎市街之図」の美しさには及ばないものの、街の情報を伝える市街図としての役割を十分に理解できる。さらに街の範囲が四方に広がりつつあったこともわかる。このように街の範囲を描いていた地図から街の機能（建物・商店街の位置等）を示す、まさに市街図が誕生したと言える。

大正二年十二月二十三日に県営鉄道妻線が運行を開始し、同時に宮崎停車場が完成、高千穂通りが開通した。翌三年には江平新道、老松通りが開削され、同四年には大淀停車場が完成するなど、宮崎市街地には大きな変化が訪れ、それは市街図にもすぐに影響を及ぼした。

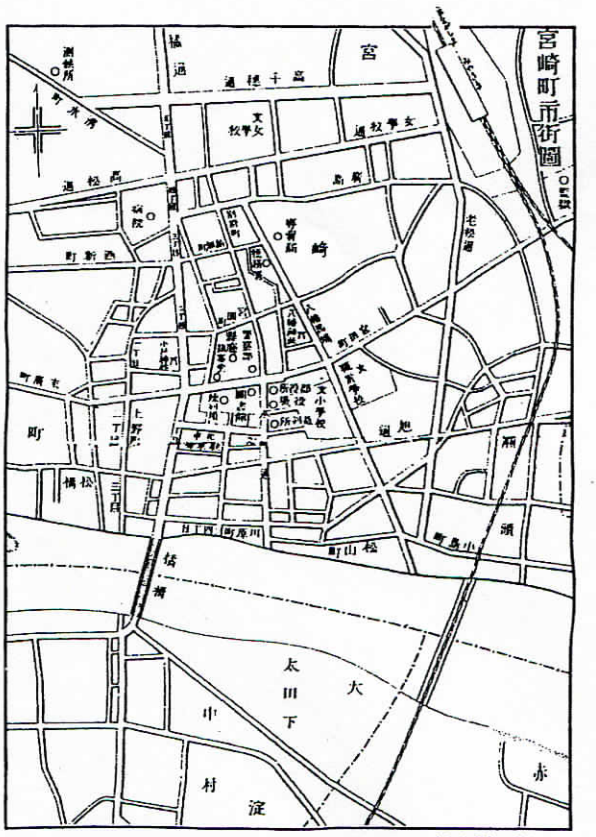

図11　大正３年「宮崎町市街図」（宮崎県勢一覧内）

大正三年の「実測宮崎県地図」、「宮崎県勢一覧」にはともに「宮崎市街図」が添付され、前者の「宮崎町市街図」（図11）には、宮崎駅、鉄道、高千穂通りそして中村町が描かれ、宮崎の街は大きく発展したかのように見える。もちろん、これは鉄道敷設等による期待される街域の広がりを示したものである。筆者が探しえた最初の「宮崎県勢一覧」は大正三年のものが最初であるが、その後も大正六年、同十年、同十三年、昭和八年、同九年、同十一年、同十六年に発行され、宮崎市街図が併記されている。毎回地図が変化するわけではないが、同様の地図で経年の変化を見るには価値ある地図である。

八　独立した宮崎市街図

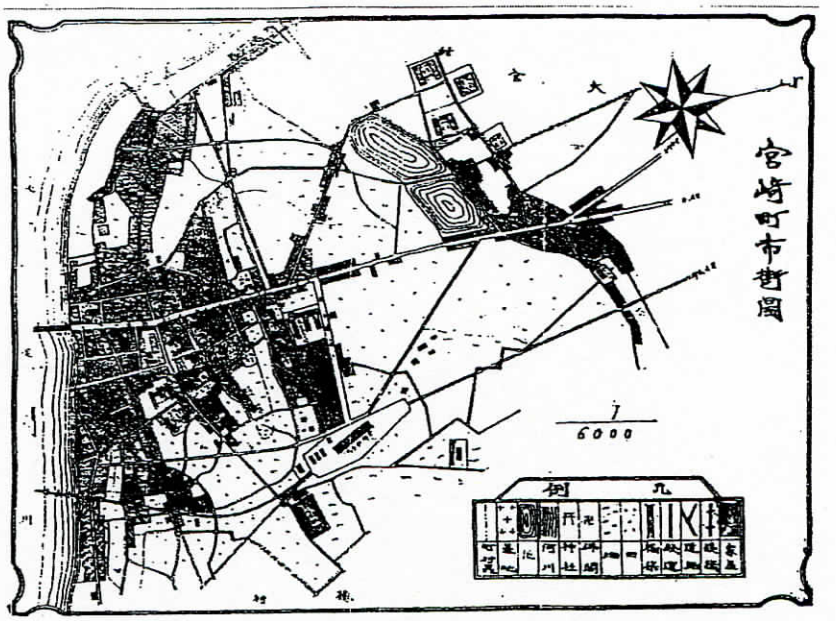

図12　大正３年「宮崎町市街図」（宮崎町史内）

大正三年に発行された『宮崎町史』に宮崎県地図の添付図ではない独立した「宮崎町市街図」（図12）が添付されている。この地図は六千分の一の縮尺で、55×42㎝の大きさであり、大淀川以北、江平町・一の鳥居付近までが記されている。ある意味では宮崎市街地も一枚の大きな地図にできるだけの発展を遂げたとも言えるが、市街地と江平町の間には田圃が広がっている。おそらく鉄道そして江平新道（宮崎停車場と江平町を結ぶ道路）の設置により、今後江平町も市街化するであろうと期待して描かれた地図と思われるが、以後宮崎市街図は次々と発行されていく。

とくに大正八年に岩元成文館が発行した「新宮崎市街地図」はその内容・正確性・色彩等において現在に至る宮崎市街図の中でも比類なき完成度を誇っている。もちろん、白黒の地図ではその素晴しさを表現できないが、市街地の一部のみ掲載する（図13）。

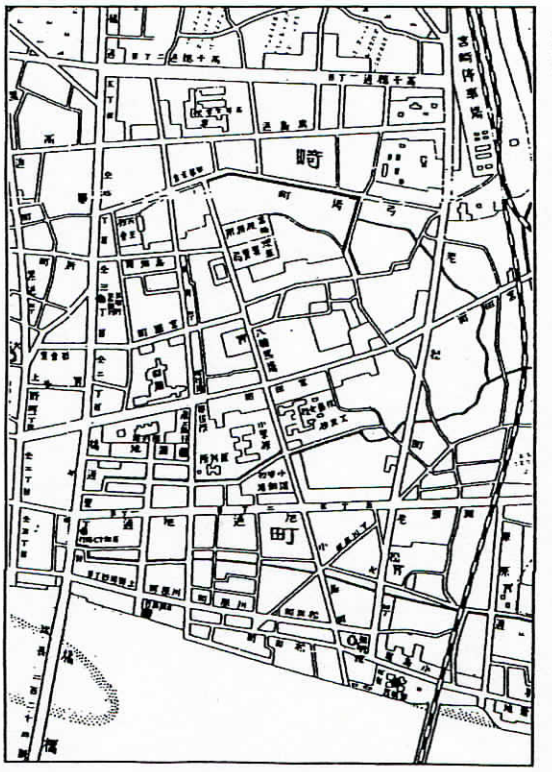

図13　大正８年「新宮崎市街地図」部分

大正十三年に宮崎町、大淀町、大宮村が合併し宮崎市が誕生したが、宮崎市街地という地域が急速に変化することはなかった。ただ「宮崎町市街地」という表現が無くなったことは事実であり、宮崎県地図に添付される「宮崎市」の地図は市全体の図ではなく、いわゆる宮崎市街地を意味するようになっていく。

昭和時代になると、地図はカラー印刷の色彩豊かなものが中心となり、当時の地図は耕地整理事業、道路改修工事等による日進月歩な街の変化を現在に伝えてくれる。しかしそのような時代にあって古くなった地図はその価値観を見出されず、すぐに捨てられていったために現在に伝えられている地図が乏しいのかも知れない。

戦前の宮崎の地図の中で異色ともいえるものは、地図名も製作年